

初期日本曹洞宗における若干の疑問点を提示して

—如浄、道元、寂円について—

胡 建 明

はじめに

本稿の目的は、私が日本曹洞宗の宗侶の一人として、日本曹洞宗における初期僧団に関して長年に亘り、些か疑問を抱いており、それをここで吐露したいと考えたからである。筆者が天童山から日本に来て早くも二三年が経過しているが、爾来枕元の横にずっと置いていた書籍が二冊ある。それは本山版の『正法眼蔵』と鏡島元隆先生著『天童如浄禅師の研究』である。

周知の通り、天童如浄禅師（一一六二—一二二七）^①（以下では如浄と略称）は、道元禅師（一一〇〇—一二五三）（以下では道元と略称）が入宋の間（一二三三—一二二七）に、約二年間（一二二五年五月一日から一二二七年五月？）太白山景德禅寺で追隨師事した恩師であり、道元の言葉では「天童古佛」、「先師」とも称せられる。

当然のことながら、もし道元が如浄と出あわなければ、宗祖として仰がれる道元も、そして日本曹洞宗も歴史上になかったに違いないであろう。

しかし当時の南宋五山十刹をはじめ、諸山においては殆んど臨濟宗大慧派の禅僧たちが牛耳っていた。叢林の中

では多少虎丘派の禅僧たちも力があつたが、それもあくまで大慧派とはもとと伯仲（兄弟）の関係があつたからであろう。道元の『弁道話』巻に述べた「見在大宋には、臨済宗のみ天下にあまねし」に示されるような多勢に無勢の状況に曹洞宗清了派はあつた。その派に属する如浄が、甲刹を経て、いきなり五山第四位の淨慈寺で二度も住山し、そして第三位の天童山まで晋住することは、非常に稀なケース、いや、不可能に近いケースであろう。ではなぜ如浄にそれが出来たのか、この疑問を答える為に、少し如浄その人の足跡と思想を顧みる必要があるであろう。

周知の通り、中国仏教史では、如浄という人物はあまり知られていなかったようである。天童山三〇代目（三一代目とも）の住持とされているが、天童山の歴代の中の天童宏智、天童密庵などの祖師と比較すれば、知名度がかなり低く、長い間に歴史の砂の中に埋もれて、次第に風化され、なかなか重視されなかつたのが事実である。むしろ日本曹洞宗のおかげで、如浄という人物像が次第に浮き上がったといえよう。日本において彼の語録がよく研究されたことによつて、如浄の真実が世に知られてきたのである。しかしながら道元と日本曹洞宗に崇められた浄祖は、本当に当時天童山堂頭の真面目なのかは問題となる。つまり道元が参随した二年間に見た如浄が、あくまでも道元によつて濾過され、神聖化されて今日に至つたという一面が存すると思われる。当時一五〇〇余名の雲水が領した天童山主としての如浄は、道元によつて描かれた、世俗と離れ、厳肅枯淡そのものの如浄像とはあまりにもかけ離れたものであろう。冒頭にも述べたように、なぜ如浄が天童山で晋住が出来たのかという疑問も踏まえて、以下に考察してみたい。

如浄その人の足跡と思想に関しては、鏡島元隆氏著の『天童如浄禅師の研究』で既に解明されたので、再び述べらなくてもないが、問題は、道元によつて描かれた如浄像の紙背に、如浄の出世の花道には、実は大慧派の人々との親密な関係があるからという要因を読みとれなければなるまい。その問題解明に考察を費やしてから、第二の疑問、

とりわけ道元と如浄の師弟関係(嗣法について)、そして第三の疑問、つまり寂円の出自(本当に宋国の渡来人?)に進んでみたいと思う。

二 三問題の考察

上述に示した如く、本論で考察したい疑問は、概して下記の通りである

(イ) 如浄と大慧派と関係はいかなるものか。如浄が死ぬ前に涅槃堂で号泣して足庵に嗣承香(2)を焼いたのは、何の意味を有したのか。

(ロ) 道元は何時何処で如浄の法を嗣いだか、なぜそんなに大事なことにについて自身の『正法眼藏』『嗣書』の巻の中で示さなかったのか。中国禅宗の重要な一派としての曹洞宗の宗名をなぜあんなに嫌うのか。その真意とは。

(ハ) 寂円(一一〇七—一二九九)は本当に道元を追って宋国から来た中国僧なのか。「洛陽」とは、中国河南省の古都洛陽ではなく、日本京都(洛陽)の出身ではなからうか。

1 如浄について

如浄は、行状と塔銘が残されていなかったため、彼の出家、受戒の時期と場所に就いては全く不明である。ただし、道元の著作を通して残っている如浄の口述では、彼は一九歳の時、教学を捨てて、諸山の叢林に徧参遊方に出たということが知られている。伊藤慶道氏著の『道元禅師研究』(昭和一四年七月初版、昭和五五年一〇月覆刻版、名著普及会)と鏡島元隆氏著の『天童如浄禅師の研究』(昭和五八年八月、春秋社)などによると、如浄が雪竇智鑑の法を継ぐ前に参学していた人々は殆んど臨済宗楊岐派の禅僧たちであった。その中には大慧派の禅僧が圧倒的に多かった。曹洞宗の禅僧としては、師の雪竇智鑑(一一〇五—一一九二)以外に、宏智派に属するのは華藏寺明

極慧祚のみである。

彼は四八歳から六六歳まで一八年間六会五道場（金陵清涼寺、台州瑞巖寺、杭州淨慈寺、明州瑞巖寺、淨慈再住、明州天童山景德禪寺）で住持したが、しかし足庵の嗣承香は一度も焚こうとしなかった。つまり彼は当時の禪林において、自分の法脈を秘して、公開しないまま甲刹から五山寺院まで晋住したのである。彼は臨終の直前に涅槃堂で師の足庵の位牌に対して、号泣しながら嗣承香を焚き、法乳の慈恩を酬いた。⁽³⁾ その時、道元はもう帰途にあったといわれる。最期まで、誰にも自分の法脈を明かさなかった如浄の心情は如何なるものであろうか。またなぜそうしなければならなかったのか。実如浄に関するミステリーがここに秘められていると私は思う。

冒頭にも触れたように臨済宗、とりわけ大慧派が南宋禪林の天下を取った当時にあつては、如浄が世に曹洞宗の法脈を示さないことこそ、うまく出世街道にのる必須の手段に違いないであろう。実際、如浄は足庵の会下にいたのは、足庵の晩年の僅か数年間だけである。その前後、如浄は虎丘派の松源崇岳（一一三二—一一三三）、大慧派の拙菴徳光（一一二二—一一三〇）、無用浄全（一一三七—一二〇七）、遯庵宗演（生没年不詳⁽⁷⁾）をはじめ、多くの臨済僧に参じた。その為、彼は大慧派拙菴の資（弟子）である天童無際了派（一一四九—一二三四）、径山浙翁如琰（一一五一—一二二五）、無用の弟子である笑翁妙堪（一一七七—一二四八）らと同参として篤い道交を結び、非常に親密な関係を有している。また無準師範（一一七七—一二四九）、虚堂智愚（一一八五—一二六九）、無文道璨（？—一二七二）なども交流していたことがよく知られている。こうして如浄は三〇年の徧参を経て、臨済宗禪者たちからの支持を得、次々と名刹への晋住を果たしたのである。

とはいえ、自分の法脈を秘して、すべて良い結果が得られたわけでもなかった。というのは、かつての杭州淨慈寺から明州瑞巖寺への降格は、嗣承香を焼かないことがその一因ではないかと推測されるからである。⁽¹⁴⁾ 如浄が極力

自分の法脈をはばかったことから考えると、その会下の雲衲たちや留学僧道元に自分の法脈を安易に吐露することも無かったと思われる。¹⁵

2 道元の問題

山本版『正法眼藏』『嗣書』の巻の文について、筆者は少なくとも百回以上は読んだ。非常に不可思議なのが道元入宋の間、天童山でいろいろな嗣書を見ていることについては、自らの記述で詳細に記されているが、しかし如浄の嗣書に関しては、なにも言及されていない点である。¹⁶それは非常に不可思議なことと言わざるを得ない。先述のように、如浄が自分の法脈を臨終時にやっと吐露したことの影響もあったと思われるが、しかし如浄と面授して、嗣書を頂戴した道元が、その「一大事因縁」について、帰国後に公言しなかったのはなぜであろうか。

『如浄禪師續語録』の道元の跋文には、如浄の法嗣について、自分を含めて六名と記しているが、鏡島元隆氏の研究では、この書物は日本人の手による無外義遠の名を託しての偽書で、信用できないと論定している。¹⁷また『建掇記』に述べられた嗣書、頂相、芙蓉道楷の袈裟、五位顯訣、宝鏡三昧などを受けて天童如浄を辞すという内容には、どのぐらいの信憑性があるか。現在大本山永平寺に秘藏されている「宝慶丁亥住天童如浄」の「嗣書」（明治三三年四月に国宝と指定され、今は格下げられている）は、紛れもなく後世に作られたものである以上、その信憑性はかなり低いというべきである。

道元が天童山で如浄と面授し、「身心脱落」という大悟の機縁を得て、正伝の仏法を日本に伝えたことは、確乎たる事実と信じられている。とはいえ、道元が曹洞宗の宗名を極力否定し、自分が伝来させたのは曹洞宗でもなく臨済宗でもなく、中国で成立した禅宗五家七宗を排した上での、仏祖正伝の仏法であると標榜したこと、また中国見性禅、五位説、宋代禅、日本達摩禅などに対して悉く徹底的な批判したことも事実である。それらを背景に、石

井修道氏の『道元禪の成立史的研究』では、道元が中国禪の根本思想を否定したことを踏まえて、「中国禪と道元禪はその意味で非連続である」と指摘している。⁽¹⁸⁾

また天福元年中元日に観音利導院で清書された『普勸坐禪儀』の署名は「入宋傳法沙門道元撰」となっている。(傍線は筆者) 普通は「入宋求法沙門」或いは「入宋得法沙門」が正しい表現であるため、「入宋傳法」という表現はいささか理解に苦しむ。

道元没後に孤雲懷奘が永平寺二代目となった。その後、義介が三代目となった段階で、「三代相論」が激しく起こり、義介、義演(四代)が持っていた日本達摩宗の嗣書は、後に瑩山の五老峯の創立に至って、やっと埋められ、根絶したのである。その際に「浄祖」を洞谷山の開祖として仰ぎ、日本曹洞宗という正統性を世に示すこととなった。しかしなぜ早くに道元に投じた、日本達摩宗に属した人々は、道元の法をつがず、終始大慧派に属する達摩宗の法統を放棄しようとしなかったのかという問題は、右の正統性に対する疑問を生じさせる。

なお承久三年(一一二二)九月一二日に明全が道元に付した「師資相承偈」は永平寺に現存している。しかしそれは榮西が継いだ黄龍派禪である。

周知のように、道元の『正法眼蔵』『嗣書』の巻では、当時の南宋仏教界の「嗣法」における軽々しい状況を述べて次のように批判している。

いま江浙に大利の主とあるは、おほく臨濟雲門洞山等の嗣法なり、しかあるに臨濟の遠孫と自称するやから、ままにくはだつる不是あり。いわく善知識の会下に参じて、頂相一幅、法語一軸を懇請して、嗣法の標準にそなふ。しかあるに一類の狗子あり、尊宿のおとりに、法語頂相等を懇請して、かくしたくはふるること、あまたあるに、

晩年におよびて官家に陪錢し、一院を討得して、住持職に補するとき、法語頂相の師に嗣法せず、当代の名譽のともがら、あるひは王臣に親附なる長老等に嗣法するとき、名譽をむさばるのみなり。(傍線は筆者) かなしむべし末法悪時かくのごとくの邪風あることを。おほよそ法語頂相等をゆるすことは、教家の講師、および在家の男女等にもさづく、行者商客等にもゆるすなり、そのむね諸家の録にあきらかなり。あるひはそのひとにあらざるが、みだりに嗣法の證據をのぞむによりて、一軸の書をもとむるに、有道のいたむところなりといへども、なまじいに援筆するなり。しかのごとくときは古來の書式によらずいささか嗣吾のよしをかく。近來の法はただその師の会下にて得力すれば、すなわちかの師を師と嗣法するなり。かつてその師の印をえされども、ただ入室上堂に咨參して、長連牀にあるともがら、住院のときは、その師承を挙するにいとまあらざれども、大事打開するとき、その師を師とせるのみおほし。¹⁹⁾

このような「かなしむべし末法悪時かくのごとくの邪風あること」に対して、道元は厳しく批判し、自分こそが正師である天童如浄の面授をうけ、「身心脱落」の確信を得て、すがすがしい気持ちで「空手還郷」したことを自負している。誠に素晴らしいものではなからうか。

道元帰国後、門下の孤雲をはじめ、心地覚心(一一〇七—一二九九、法灯派の祖²⁰⁾)、理観などに授与したのは「佛祖傳菩薩戒」である。その一部の内容は、道元は宝慶元年(一二二五)九月十八日に天童山で如浄から授かった戒法である。

3 寂円について

寂円の出自や出家等については、殆んど謎に包まれている。一番古い資料は永平十三世建綱の『宝慶由緒記』の

みである。その文の冒頭を見ると、「薦福山宝慶寺開山寂円禪師者、大宋國落陽^{（洛陽）}之人也。幼年登大白山剃髮受戒、依如淨禪師得悟。普參大宋國諸山之名師、究東西之玄奧云々」とある。⁽²³⁾

それだけを見ると、寂円の出自や出家などの行跡がよく説明されている。しかし、寂円派の建綱は永平寺十三代目住職であり、文明元年（一四六九）に亡くなった人であるから、寂円入寂の正安元年（一二九九）から数えて既に一七〇年の歳月が経過している。この記録の信憑性がどれくらいあるかについては、問題がある。

また、江戸時代の名僧面山瑞方（一六八三—一七六九）の『永福面山和尚広録』巻二十五「宝慶寺寂円禪師伝」では、越前薦福山宝慶禪寺開山寂円禪師、大宋国人。依天童浄和尚削染、時名智琛、永平祖在天童友好。（中略）師曾侍浄和尚日、写真乞賛、和尚乃題曰…坐断乾坤、全身獨露。喚作本師和尚、當甚冬瓜茄瓠、更好笑、金剛倒上梅花樹。徒弟智琛乞語太白（老僧）。下有花押、此幅乃師乃之所自宋将来、而現今納於宝慶室中。

とある。この記録は、明らかに建綱の『宝慶由緒記』を踏襲したものである。佐藤秀孝氏の研究によると「智琛」は即ち寂円ではないという。（佐藤氏の論文「徹通義介と天童如浄禪師の頂相」と「宝慶寺所蔵の天童如浄頂相について——徹通義介の入宋と頂相将来説を踏まえて——」を参照）

寂円は本当に中国河南省洛陽の人なのか。これについて、私は大いに疑問を抱いている。その理由は、纏めて以下の三点が挙げられる。

① まず、当時南宋寧宗、理宗朝と北方の異民族国家の金とは敵対的な関係にあったことを忘れてはならない。というのは、寂円が生まれた寧宗の開禧三年（一二〇七）という年は、ちょうど韓侂胄（一一五二—一二〇七）に

よって、前の年（開禧二年）に金を討伐する「開禧の北伐」が強行され、そして完敗を喫した年である。これによって、金の大軍は南下し、南宋に攻めてきた。楊次山、史弥遠たちが宋国の滅亡を救うため、金と和議をはかり、金の撤退する条件に応じて韓の首を斬り、塩水で漬けて金に渡したという事件があった。このような時代背景に於いて、つまり金の治下の洛陽で生まれた寂円が「幼年（十歳前後か）登大白山剃髮受戒、依如淨禪師得悟」という記述が可能であったかを考えると、それは全く無稽な話に帰するのであろう。この点については佐藤秀孝氏も早く気づき、以下のように敷衍している。

「洛陽（河南省）は古く中国の都として知られた地だが、当時は金国の治下にあった。南北対立の国情からすると、寂円をただちに古都洛陽の人とするには無理が存するようである。だが『宝慶由緒記』がまったく根拠もなく「落陽」の人と記したとは見られないから、寂円の先祖が洛陽を本貫（郷里）とする一族であった可能性も存しよう。あるいは洛陽を単に京師（みやこ）の意と見るならば、南宋の国都である杭州（浙江省）臨安府の人であると解される」（『禪の風』No.23、特集「遙かなる中国 道元禪師と中国僧寂円」二八頁を参照）とある。しかし、佐藤氏の説明では、仮令「本貫説」が可能としても、「京の杭州説」は通らない。なぜならば、杭州はあくまでも宋朝の臨時的な京（臨安）であり、洛陽という呼称はない。しかも、「本貫説」の可能性を追究すると、問題が無いわけでもない。

② 『宝慶由緒記』によると、宋宝慶三年・日本安貞元年（丁亥、一二二七）、道元禪師が帰朝の時、寂円禪師が明州の港まで見送りした際に、道元と一緒に船に乗り、来朝しようとしたという記述があり、また、翌年に寂円が商船に乗り込み、来朝して興聖寺で道元と再見したと記されている。しかし、安貞二年（一二二八）に道元はまだ建仁寺に留まっている。道元が建仁寺を辞し、深草極楽寺の安養院に移るのは、寛喜二年（一二三〇）であり、また興聖寺を創建したのは天福元年（一二三三）なので、建綱の記述は全く間違っているし、寂円の興聖寺で道元と

の再会は事実に符合していない。

その翌年の文暦元年（一二三四）に達摩宗出身の懷奘が興聖寺道元に投じた。建綱の『宝慶由緒記』によると、興聖、永平に於いて、寂円は浄祖を祀る承陽庵の塔主に任ぜられたという。

③ まず『宝慶由緒記』の云々については論ぜずに置こう。寂円という人物が、天童山如浄の膝元において、道元と同参で、また道元を慕って命懸けで来朝し、そして道元の懐に飛び込んだことがもし本当ならば、なぜ道元の『正法眼藏』や『永平広録』『宝慶記』においては一言も言及されなかったのか。そして寂円には法も伝えずに終わったのかという問題が残る。（寂円は道元入寂後、孤雲懷奘の印可を受けたといわれる。）

以上の点から、紀傳、塔銘が全く残っていない寂円については、宋国洛陽の人という説について、頗る疑問を感じる。宋国人と伝えられるようになったのは、恐らく寂円がかつて如浄を祀る承陽庵の塔主を務めた（待真）ことと、宝慶寺（道元が如浄に参じた時の宋理宗の年号は宝慶である）の開山であることが発端ではないだろうか。しかしこれは中国洛陽出身の渡来僧であるとの根拠には結びつかない。

結論的に言えば、寂円は宋国洛陽の人という説は、後代の附会に過ぎないと私は主張したい。寂円はむしろ京都の出身の日本人と見た方が自然だと思ふのである。「洛陽」というのは、河南省の「洛陽」ではなく、京都の別称の「洛陽」であろう。

三 筆者はなぜ以上の疑問点の提示したかったか

さて、如浄の参学、住持などの経歴から自ら「法脈」に対する態度については、既に概略を論じた（問題イ）。そして道元の「嗣法」について、「嗣書」の巻などを検討した（問題ロ）。そして寂円の出自や出家、得道などに

ついで、建綱の『宝慶由緒記』を通して、その矛盾点を指摘し、「洛陽」という地名について、私なりの新説を出した（問題八）。

これらは一見破天荒な説に見えるかもしれないが、しかし初期曹洞宗に関して、決して解決済みとされうる問題ではあるまい。こうした疑問を示して、宗学研究の諸賢の高見を傾聴したい。したがって本論はただの問題提起に過ぎないのである。

最近、石井修道氏の高著と諸論文を改めて拝読したが、その中に「仏祖の嗣法の話の成立過程——道元禪師の引用例と関連して——」（七百五十回大遠忌記念『道元禪師研究論集』平成一四年八月、大本山永平寺発行）という論文があつて、非常に興味深く読んだ。特に一〇二頁から一〇三頁において示された、伊藤秀憲氏の『道元禪研究』で示されている、道元が如浄の会下に於いて、相見から大悟、面授、そして受戒、嗣法という展開を行ったという説への指摘については、大きな共感を持つのである。

四 結語

今まで、如浄、道元についての研究は、日本の学界、とりわけ曹洞宗宗門関係の研究機関に於いて大きな業績が収められている。しかし、なお多くの問題領域、特に初期曹洞宗僧団における動静について等の問題については、相変わらず多くの先入観に囚われている嫌いがあり、すべて客観的な態度で取り込んだ研究とは言い難い現状にあるのではなからうか。

この小論で示した見解の是非については、結論を保留することも可能だが、ただ先述したような疑問が実感されるために、敢えて筆をとつたのである。学的な研究は、なるべく信仰に妨げられないよう祈念するばかりである。

注

- (1) 如浄の生没年は、従来は(一一六三—一二二八)となっていた。しかし佐藤秀孝氏の『印度学仏教学研究』第三卷第一号(一九八五年二月)に掲載した「如浄禪師示寂の周辺」では、古写本『建搨記』等に基づいて、如浄に示寂を宝慶三年(一二二七)とし、如浄を一二六一—一二二七の一生とする新説を出している。筆者はこの説に非常に賛同するため、本論では佐藤説を採用する。
- (2) 嗣承香は、興化存獎にはじまり、開堂の当日、得法の師僧の名を発表する為に必ず行うのを通例とした。勅修百丈清規卷上住持章開堂祝寿の條には、「拈香祝聖、次拈帝師省院、臺憲郡県、文武百官香、侍者逐一度香。惟法嗣香住持懷中拈出、自挿爐中」とある。(傍線は筆者)
- (3) 如浄の伝記の最古のものは、枯崖円悟の『枯崖漫録』(一二六三年成立)の中の記事である。(『續藏經』卷一四八—七八a) または、鏡島元隆氏の『天童如浄禪師の研究』七〇頁及び四〇四頁を参照。或いは、石井修道氏の『道元禪の成立史的研究』四〇七—四〇八頁を参照。
- (4) 『松源和尚語録』卷下には「示如浄禪人」がある。また『如浄禪師語録』の偈頌の部に「拄杖寄松源和尚」の七言詩がある。
- (5) 道元『正法眼藏』「行持」の卷に「某甲(如浄)そのかみ径山に掛錫するに、光佛照そのときの粥飯頭なりき」とある。
- (6) 『如浄禪師語録』卷下「讀佛祖」の條には「無用頂相」と題する真贊がある。
- (7) 『如浄禪師語録』卷下「送亮威主謁碧雲」の偈頌がある。亮威主は大慧の資である遯庵宗演の法嗣西山亮(一一五二—一二二二)である。如浄が清涼寺に晋住する前に華嚴褒忠寺で遯庵の提撕を受けたと考える。
- (8) 『如浄禪師語録』には、「派和尚遺書至上堂」がある。一二二四年に如浄は浄慈から天童への晋住は、了派の遺言で推挙したからである。
- (9) 『如浄禪師語録』には、「浙翁遺書至上堂」がある。一二二五年に如浄が天童山に住持した時のこと。
- (10) 笑翁妙堪は天童無用浄全の弟子で、かつて如浄と同参だと思われる。宰相史彌遠は嘗て如浄を明州大慈寺の開山として請うたが、如浄は妙堪を推して譲ったという説もある。石井修道著『道元禪の成立史的研究』三七七頁を参照。
- (11) 松源との法の兄弟である破菴祖先(一一三六—一二二二)の法嗣、無準師範と如浄との親交については、一二二七年七月如浄が無準のところ(雪竇山)に遺書を送っている。これを受けた無準には、「前任天童浄和尚遺書至上堂」の語がある。(『無準師範語録』卷一)また、清涼寺時代の如浄は、無準の弟子頑石玉のための「玉頑石住報慈陸座」の上堂語が『如浄禪師語録』にある。

- (12) 虚堂智愚は松源の弟子である運庵普巖（一一五六一—一二二六）の法嗣である。『増集續伝灯録』巻五によると、虚堂が浄慈寺時代の如浄に参じ、その提撕を受けていることが窺える。また、松源の弟子である掩室善開（生没年不詳）については『如浄禪師語録』に「謝掩室和尚上堂」の語がある。
- (13) 無文道璨は笑翁妙堪の弟子であるが、無文が清涼寺時代の如浄に参じ、如浄の清涼寺語録では「璨禪客上堂」がある。無文は『無文印』という著書で、如浄について触れている（小仏事・題跋附）。また無文は如浄の弟子、雪屋正韶（一二〇二—一二六〇）の塔銘も書いている（『無文印』巻五）。
- (14) 伊藤慶道著『道元禪師研究』一〇九—一〇頁（二）明州瑞巖寺時代を参照。
- (15) 『寶慶記』には、如浄が道元の問いに対して、足庵のことを「雪竇先師」と記しているのは、とても奇妙に感じる。（宇井伯寿訳註禪籍集成五『寶慶記』三四頁を参照。平成二年一月、岩波書店）
- (16) 本山版『正法眼藏』「嗣書」の巻（一四四—一五〇頁）を見ると、道元在宋中には、少なくとも五つの嗣書を拝見している。それは、①「惟一西堂」の法眼下の嗣書、②「宗月長老」の雲門下の嗣書、③日本人隆禪上座に通じて見た「傳蔵主」の楊岐派仏眼清遠下の嗣書、④小師僧智庾より見た大慧派無際了派の嗣書、⑤天台山平田万年寺元鼎の嗣書である。特に④⑤の場合は、道元が「喜感無勝」、「感涙霑袖」として感激したと述べている。
- (17) 『天童如浄禪師の研究』の第一章「如浄禪師語録」の研究」三六—四〇頁を参照。
- (18) 『道元禪の成立史的研究』の第二章「道元の見性批判」一七七頁第六行目。
- (19) 本山版『正法眼藏』一四六—一四七頁を参照。
- (20) 『道元禪師全集』第六卷（春秋社、一九八九年一月）二二九—三三二頁に道元が心地覚心に授かった「授覚心戒脈奥書」では、黄龍派懷敏と曹洞宗清了派如浄の二系統の「菩薩戒脈」を示している。
- (21) 上掲書、二二五—二二七頁に道元が理観に授かった「授理観戒脈」では、天台大師、傳教大師から栄西、明全までの叡山天台系と達摩、黄龍慧南、懷敏から栄西、明全までの黄龍派の二系統の「菩薩戒脈」を示している。
- (22) 『宝慶由緒記』の末尾には、「永平伝法第十二世兼宝慶伝法第十四世嗣祖比丘建綱」と記しているが、それは、建綱が三代目の義介、四代目の義演を除いて、開山の寂円を第三代目に追認し、義雲を第四代目にさせたからである。
- (23) 『修行の寺宝慶寺』（宝慶寺発行、一九八六年五月第一刷、一九九八年四月第四刷）六〇—六三頁（『宝慶由緒記』）を参照。